

新発田青少年健全育成市民会議だより

は ば た き

市民みんなで手をたずさえて

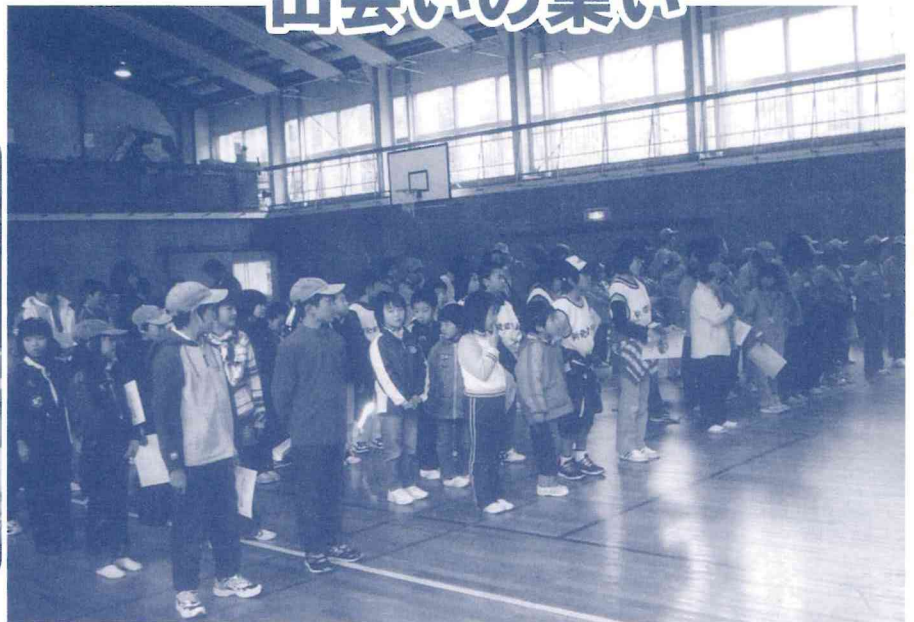
少年団体交歓会 『わくわく台宿』

少年団体活動推進委員会 平成20年11月8日(土)・9日(日) 新潟県少年自然の家(胎内市)

出会いの集い



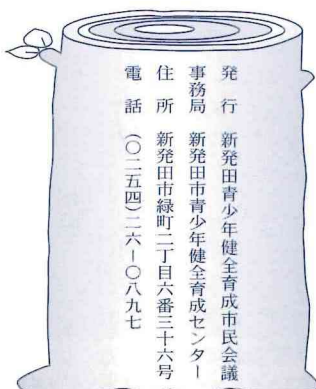
サバイバルめし食器作成



牛乳パック燃料作り



代用釜でのめしたき



発行 新発田青少年健全育成市民会議
事務局 新発田市青少年健全育成センター
住所 新発田市緑町二丁目六番三十六号
電話 (〇二五四)二六〇八九七

青少年健全育成講演会（平成二十一年一月二十四日）

サイバー犯罪から子ども達を守る

（要旨抜粋）

新潟県警察本部

大嶋 隆義様

ケータイに縛られた生活

○今の子ども達は、携帯電話によるメールのやりとりに関して敏感となり、情緒的に不安におちこんでいる子どもが多い。

・携帯電話を持つていないことで仲間に入ることができない。

・メールを送っても応答がないと、無視されているのではないかと不安になる。



・返事がないと、つき合いが悪いと相手にされない。

・勉強中や食事中でも、友だちからの着メロで、すぐさまその方へ反応しなければならぬ。

メールのやりとりが、生活の支えになってしまい、まさに携帯電話依存症となっている。

トラブルへの心配

○インターネットへの接続で次のようなトラブルや事件にまきこまれることがある。

- ・電子メールによるもの
- ・子どもたちの大部分は、このメールやりとりを中心にしている。
- ・さまざまな有害サイトの閲覧によるもの
- ・情報を発信することによるもの

○メールによるトラブルで、今学校で一番問題になっているもの

のに、「なりすましメール」がある。

・誰か全くわからない相手が、他人のアドレスになりすまして「ウザイ」とか「キモイ」、「死ぬ」などの脅迫メールを送りつけてくる。

・被害生徒は、「あるいは自分が嫌われているのでは」とか、「学校へも行きたくない」となど不安となり、不登校の原因ともなる。

・匿名による、相手が全くわからないままに、誹謗や中傷を受けて、加害者の相手を知ることができない焦り。問題は、インターネットの世界が「メールの偽装が簡単にできる」ということにある。

○有害サイトの閲覧によるトラブルでは、男の子がアダルトサイトへ興味本位でつないでいるのに対して、女の子が「出会い系サイト」へつなぐことでおこるトラブルが、非常に多い。

・18歳未満の児童は、「出会い系サイト」の利用が禁止されているため、一部業者は表向き出会い系とは表示しないでいるものがある。

・「出会い系サイト」とは知らないままメールのやりとりをしているうちに、実際の

福祉犯にあらう可能性にまきこまれることとなる。

その他、有害サイトでは、物品販売のオークションを舞台としたトラブルや、掲示板を利用した詐欺トラブルなどがおきている。

○情報を発信することによるトラブルでは、「プロフィールサイト」が大本となっている。

・「プロフィールサイト」というのは、自分の名前や顔写真、学校や学年、部活動のほか交友関係、さらに嗜好品までを、自ら堂々と公開して、発信（紹介する）ものである。

・この「プロフィール」は自己紹介機能だけではなく、紹介内容をもとにして、見知らぬ相手から狙われて、思わぬ方向にひきこまれるという危険がある。

・しかも、他人が名前を勝手に使用して、本人に「なりすまし」ている場合も多く、トラブルは複雑にひろがっていく。

○さらに、情報発信によるトラブルでは、「学校裏サイト」などと呼ばれているものがある。

・「プロフィール」などで、学校関係を含む個人情報ネット上

まとめ

に公開されることによって、学校生活での友人や男女の関係について、勝手な「なりすまし」が介入して、しかも、学校間の境をこえてのやりとりとなる。

・学校間にまたがることで、問題の解決が困難となったり、非行行動のグループ化にもなりやすい。

携帯電話の小さな画面の向こうは異質な世界であり、しかもそこは機械相手ではなく、人間相手であることを理解しなければならない。

・自分への思わぬ被害だけでなく、他人に取り返しのつかないことにもなることをわきまえ、「情報モラル」の教育が大切となる。

・一方、有害サイトに近づかせないために、この四月から法律で、子ども達が契約する携帯電話には、フィルタリングをすることになっているので、このシステムについても理解を深めていただきたい。

保護者、学校が中心となって適切な対応に努力いただきたい。

携帯電話の所持、使用についての対応

○文部科学省

文部科学省は、一月三十日「携帯電話は、小中学校の教育活動には必要ない」として、学校への持込み禁止を各都道府県に通知するとともに、

- ・情報モラル教育の充実
- ・家庭での利用ルールづくりを推進するよう求めている。

○県内小・中学校では

学校への持込みについて、県内小、中学校の全校で原則禁止を指導しています。

ただし、一部の学校では、

- ・子どもの塾通いのための連絡に
- ・子どもの登下校時の安全確認に

などの理由から保護者の申請を受け、持込みを認めています。

○市内小・中学生の携帯所持率

(小学校)

男子	女子	全体
8%	9%	8%

(中学校)

男子	女子	全体
20%	32%	25%

「子どもと携帯」

大山 正義 (御幸町)

便利さを追求してしまうだけで、本来の人間的な付き合いを欠いてしまう危険性が高いのも今の子どもだ。だから、子どもには必要はない。

犯罪が多いアメリカでも高校生までは法規制により携帯をもたせない。昔から未成年者の飲酒も社会全体で防止してきた。不審者防止よりも他人に迷惑をかける犯罪の方を優先するからである。世界一治安が良いと言われる日本なら携帯は必要ない。

子どもの安全ではなく、親の安心や都合なら携帯は必要ない。今こそ全ての親が、子どものネット犯罪や問題に気づくべきである。行政は単に法的措置をするのではなく、害となる実態を多くの方に知ってもらうよう働きかけるべきだ。我が御免町小学校では、私の提案でこの問題の校内家庭教育講演会を開催する。市全体で一回のみではなく、全小学校区単位でこの問題の「気づく会」を開くべきだ。

しばたっ子わくわく通学合宿

新発田市教育委員会

市教育委員会では、平成十九年度から小学四、六年生を対象に「しばたっ子わくわく通学合宿」を実施しています。

通学合宿というのは、文字どおり、公共施設等で子どもたちが

が寝食を共にしながら学校に通う活動です。新発田市では六泊七日の共同生活を通じて、規則正しい生活習慣や望ましい食習慣を体験し、新発田の子どもたちの「生きる力」の習得に寄与することを目的としています。

活動はすべて子どもたちが主体です。朝夕の食事作り、後片付け、食材の買出し、掃除、洗濯にいたるまで、すべて自分たちで行うので大変な面もありますが、自分の役割を果たし、やり遂げた後は大きな達成感に変わります。

この事業の成果は、一週間互いに協力し、助け合いながら過ごすので、少しずつ相手に対する思いやりをもつ優しさが育まれ、また生活面では、挨拶や手伝いなどを以前よりすすんでできるようになったという良い変化があげられます。一週間、親元を離



食事のしたく



食器の整理



金蘭荘

れて生活することは、家族の存在をあらためて考えるよい機会になったという面でも参加児童と保護者の双方にとって貴重な経験となっています。

通学合宿実施の際には、地域の方々や大学生ボランティアのみなさんに多く関わっていただいています。家族や学校以外の大人と触れ合う大切さは言うまでもありません。これからも、地域の方々の協力を得ながら、この事業をととして子どもたちを見守り育んでいきたいと考えています。

・参加した児童数

- 4年…31人(男14人、女17人)
- 5年…28人(男17人、女11人)
- 6年…27人(男15人、女12人)

・宿舎

- 老人福祉センター 金蘭荘
- 紫雲寺老人憩いの家 眺海荘
- 加治川総合福祉センター さくら苑

地域交流センター

子どもたちの“心”を育てましょう(2)

現代の社会生活や家庭生活の状況には、「心が育ちにくく、心を失いやすい」場面もあるようです。豊かな心を育てるために、先号ではおもに「家庭生活」を中心に、このたびは地域生活を視点に、皆さんから「思い」を述べていただきました。

子ども達の 思いやりの心を 育むために

青山 武夫 (豊町)

近年の核家族化の進行により祖父母と孫とのふれあいの機会が減少する中、高齢者に対する「思いやり」や「いたわり」の心が薄れてきている現状があると懸念されています。

子どもには、こころ豊かに育つてほしいというのは、誰もが願うところでしょう。

高齢者とのふれあい

地域で生活している高齢者とのふれあいは、子ども達に思いやりや他者への敬いの心を芽生えさせ、高齢者には新たな生きがいを作り出し孤独感の解消を図ることが期待できると考えられます。

例えば、子ども達に敬老会の参加や施設訪問など、ほんの些細なことでも交流の機会を増すべきではないでしょうか。

高齢者はもちろん、子ども達も喜んでくれる高齢者の姿に人々のために何かをしてあげることの大切さと楽しさを学ぶことが出来るのです。

活動体験を大事に

このように、子ども達の心の成長には、地域での活動体験が

少なからず良い影響を与えるものと思われまふ。

最近の子ども達は大変忙しく余暇の時間が少ないのが現状です。しかし、親が子どもの幼少期から高齢者とふれあう機会を持たせることで、他者へのいたわりや思いやりの尊い心を育むことが出来ます。高齢者をはじめとする弱い立場の人々には、地域の皆が互いに協力し、安心して暮らせる環境づくりを更に推し進めていくことが重要ではないでしょうか。



安心感ある 社会を

伊東 寿明 (紫雲寺)

私の住んでいる稲荷岡地区では、若い人が中心となつて地域の活性化のために取り組んでいる。30年程前まであった神社の祭りを復活させ、子ども御興や

流しそうめん、焼き肉、焼きそばなどを自前で買ったときはたくさんの子も達が集まった。他の行事でも一番に子ども達のことを考えて企画している。先日バレーボール大会の後餅まきをして、袋いっぱいにお菓子や餅を入れて帰る子ども達はみんな笑顔であふれていた。

昨年は、秋葉原をはじめとする無差別殺傷事件など凶悪事件が発生し、世の中を震撼させた。幸い私達のまわりの子どもを見てもそんな心配は感じさせない。ただ強いて言えば、他の人ともあまり話さない、自分の意志をあまり示さない子どもが増えてきたような気がする。少子化やメール・ネットですべてを済ませることが出来る便利な時代である。人と接する機会が少なくなり、話すことも少なくなってきたという社会背景が伺える。

日本人は、親から子への「言い伝え」で世界の中でも高い道徳性を維持してきたと言われている。そして今、私達は人同士のつながりを見直すときにきている。日頃から大人は子ども達に声をかけ、子ども達に安心感を与えることができる社会を築くことである。地域の行事や祭りなどをもう一度子ども達の目線で考えてみてはどうだろうか。

たかが靴の 揃え方にも

石見 徹 (車野小)

毎週佐渡汽船を利用している。二等の絨毯席で靴を脱ぎ、寝ていくことが多い。そんな中、気になることがある。靴の脱ぎ方・揃え方である。絨毯への進行方向を向いたままになっている人が意外に多い。それでも、靴を揃えてあれば許せる範囲だが、中には左右の靴が離ればなれになっているもお構いなしの人も多い。場所が佐渡汽船なので佐渡の人ばかりかと思いきや、観光シーズンでも同様である。これは特に若者に多い。そんな時はきまって、その人の家の玄関を想像してしまふ。家でも同じように脱ぐのであろうか。まさか家ではこんな脱ぎ方はしないだろうな、などと。

そんなある日、私の後から年配の女性が乗り込んできた。靴を脱ぎ絨毯に上がると、膝をついて靴を出船の形にそろえた。ついでに近くにあった何足かの他人の靴を揃えてから空いている場所に座った。その仕草に私は日本人としての美しさを感じた。最近江戸しぐさが見直されているが、一昔前までは誰もが

できて当たり前のことだった。

ただか靴の揃え方だが、それができる人は、他の場面でも(例えば電車内での携帯の使用等)してよいこといけないことの区別がつくようになる。

これは、子どもの問題と言うより、親の問題かも知れない。家で教えられている通りに子どもは育つのですから。

子育て

応援団として

猿子 洋司 (大手町)

近年、核家族化の進行、就労環境の変化、近隣同士のつきあいの希薄化などを背景に家庭や地域における子育ての力の低下が著しくなっており、本来愛情に包まれて育つべき子ども達にとって、不幸な育ちにくい社会環境が形成されつつあります。

昔は、子どもは「宝」と考えられ、親、祖父母、親類はもちろんのこと、なにかあれば隣近所が手を差し伸べ一緒に育つ子どもを育てることが当たり前であったと思います。

しかし最近では生活様式、いや生活感覚の違い、核家族、地域の都市化などから昔ながらの手つなぎ心つなぎの糸が寸断され子育てが孤立化し、その結果子育て

経験の未熟な親(特に母親)にのみ重圧がかかっているといった状況が目立っている。

また、生まれる子どもの数も減り、町内に響く甲高い子どもの遊び声や汗まみれで駆け廻る子ども達の姿が消えてきている現状であります。

学校や塾では覚えられない「人として生きる術」や「人として生きる心」といった大切なものを身につける機会も減ってきたように思う。遊びの中で育つ「子ども同士の育ち合」という場が極端に少なくなり、年をおうごとに「おなじ町内だもの隣の子もうちの子」という意識も消えなくなり近所のおじさん、おばさんといった人々との人間関係も薄くなっているようです。

私は子育て応援団の一員として、通学時の声かけをし子ども達の成長を見つめて行きたい。



住吉小学校区

母親クラブ全国表彰

会長 近 弘子さん

平成二十年十一月六日、住吉小学校区「母親クラブ」(会長近弘子さん)が、栃木県宇都宮市での全国地域活動連絡協議会大会の席上、多年にわたる地域活動の発展と青少年健全育成活動への功績により、団体表彰と会員の個人表彰を受けられました。

住吉小学校区母親クラブは、平成三年六月に設立して十八年目を迎えられ、この間、毎年次のような事業を積極的に展開してこられました。

『本町の活動』

― 地域で出来ること ―

本町ブロック
青少年育成会会長 岸本 正智

今日の社会変化は、子育てで誰もが「これで大丈夫だろうか」と不安をもつ環境におかれています。こうした背景を真摯に受け止め「今、地域で出来ること」を、保護者・地域・学校・保護司の方々の協力を得て前向きに楽しく活動しています。

◎教育懇談会の開催

毎年、小・中学校毎に、テーマを設定し懇談会を行います。

◎講演会の開催

毎年、青少年の話題をテーマ

- ・ 夏休みの「こども夏まつり」
- ・ 公園等の遊具の安全点検と犯罪防止の環境点検
- ・ 新入学児童のお祝い「おめでとう大会」

- ・ 会員研修の実施(施設見学、職場見学や、生活技能の講習など)

また、着実な事業へ地域からの評価も高く、三十二名の会員は和やかな交流を基盤に、地域からの期待に応えています。

なお、平成十五年からは、母親クラブの活動は、新しい全国組織「みらい子育てネット」へ加入し、県内外の組織と連携しています。

に講演会を行います。

◎広報の発行

毎年、年二回「本町の子ども」を発行しています。

こうした活動から、大人自身が見直し子育ての原点に還り、地域の協力や支援を得ながら、子どもと共に困難を解決しようとする勇気と知恵を期待しています。

※「本町ブロック青少年育成会」

は、広域な外ヶ輪小学校区の事業の効果的運営を図るために、六ブロックにわたったものの一つであります。



よるこびの表彰状を手に

(右から)

- ・ 笠井 ヤヨイさん(住吉町)
- ・ 近 弘子さん(住吉町)
- ・ 中村 光子さん(御幸町)



グループにわかれ
熱心な話し合い

笑顔あたたか、すくすくと

加治川ラビット

クラブ

「自分らしく」

代表 大滝 潤

(加治川)

私達のチームは、今から4年

前に地域の子供達6人でヒップホップダンスチームを結成しました。結成してから今年で丸4年がたち今では、大人も子供も含めて35人のチームになりました。ヒップホップダンスの目的は、体力作りはもちろんですが、踊るふりを覚える、そのふりを曲に乗せて自分らしくかっこ良く、皆などと合わせて踊るとい事です。又、地域の人や家族、イベント先の観衆のみなさんに日頃の成果を発表する。この発表する時がもっとも、自分らしく、そしてなんとも言えない緊張感が心にとても良いと感じます。発表をおえたあとの清々しい気持ち楽しさは、本当にダンスをやつて良かったなあといつも感じます。そして見てる家族の方は、自分の子供が成長したなあと感じる時でもあると思います。

このダンスを通して子供達大人の体力向上、自己表現、見て頂く方に喜んで頂ける様に練習を重ね頑張つてこれからも続けて行きたいと思ひますので地域のみなさん、家族の方応援よろしくお願ひ致します。

明るいいいさつ

金田 緑

(紫雲寺)

私の住んでいる地域の子供達は、あいさつがとても明るく、元気がいい。登校中の子供達からは、「おはようございます」と声をかけられる。その一言で、大人の私まで、すがすがしい気分になれる。また、学校帰りには、「こんにちは」と元気なあいさつをしてくれます。

学校でのあいさつの他に、地域の人々にもあいさつをしてくれるのは、嬉しくて、大人の私たちまで、「今日も頑張ろう」という気持ちにさせてくれます。

あいさつで地域全体が明るく子供達と大人の絆が深まること

子供といつしよに

楽しむ

渡辺 恵子

(豊町)

我が家には、四年生と一年生の男の子が二人います。

その二人の子供は幼稚園の時からよさこいをしています。

そしてその子供中心とするチームに私もいっしょに踊らせて頂いています。

親子でよさこいを楽しむ。

又学区を越え新発田市の子供達が集まり、幼稚園児の子から小学校六年生までの子が一つのことを楽しむ姿はとてもすばら



で、子供達を守る地域力が高まっています。

しいものです。

いじめなどが多いこの世の地域を越えての仲間作り、子供達だけでなく、親同志の関わりも深くなり、仲の良いこのチームが大好きです。

登校は

駐在さんと...

渡辺 富子

(豊浦)

「おはようございます」

今朝も家の前を子供達を通るいつもと同じ朝の光景だ。ただ他の地域と少し違うのは、列の最後尾を駐在さんが一緒に歩いているのだ。彼がこの地に赴任してから毎朝の事だ。

月岡温泉から本田までの2kmあまり、何やらにぎやかに話している。どんな事を言っているのだろうと、ほほえましくなる。

「ほら信号が変わるぞ急げ!!」

「はい」急いで通りすぎる。

何やら不安定な世の中と言われているが、この子供達が大人になり、たとえ道を外れたとしても必ず戻つてこれると信じられるひとときである。



あとがき

携帯電話に新しい機能が付加され、その便利さが高められて、まさに文明の利器ではありますが、その裏側に潜む暗部には驚かされました。

有害情報から守るためには、「情報モラル」の学習と、家庭内の「使用ルール」の指導が当面の課題であると強く思われます。

「心の教育」特集では、先号に続き皆様から多くのご意見をいただきました。当市民会議でも、推進のための方策(焦点化、組織化)が図られればと思います。

(榎坂)

編集部

弘み子 緑夫子
宣さ富 忠房
坂原 辺田 井山
榎大渡 金櫻青

